文語詩稿　一百篇

宮沢賢治

青空文庫

目次

母
岩手公園
選挙
崖下の床屋
祭日〔一〕
保線工手
〔南風の頬に酸くして〕
種山ヶ原
ポランの広場
巡業隊
夜
医院
〔沃度ノニホヒフルヒ来ス〕
〔みちべの苔にまどろめば〕

〔二山の瓜を運びて〕
〔けむりは時に丘丘の〕
〔遠く琥珀のいろなして〕
心相
肖像
暁眠
旱倹
〔老いては冬の孔雀守る〕
老農
浮世絵
歯科医院
〔かれ草の雪とけたれば〕
退耕
〔白金環の天末を〕
早春
来々軒
林館開業

コバルト山地
早害地帯
〔鐘うてば白木のひのき〕
早池峯山巓
社会主事　佐伯正氏
市日
廃坑
副業
紀念写真
塔中秘事
〔われのみみちにたゞしきと〕
朝
〔猥れて嘲笑(あざ)めるはた寒き〕
岩頸列
病技師〔一〕
酸虹
柳沢野

軍事連鎖劇
峡野早春
短夜
〔水楢松にまじらふは〕
硫黄
二月
日の出前
岩手山巓
車中〔二〕
化物丁場
開墾地落上
〔鶯宿はこの月の夜を雪降るらし〕
公子
〔銅鑼と看版　トロンボン〕
〔古き勾当貞斎が〕
涅槃堂
悍馬〔二〕

巨豚
眺望
山躑躅
〔ひかりものすとうなゐごが〕
国土
〔塀のかなたに嘉菟治かも〕
四時
羅紗売
臘月
〔天狗蕈　けとばし了へば〕
牛
〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕
〔廐肥をになひていくそたび〕
黄昏
式場
〔翁面　おもてとなして世経るなど〕
氷上

〔うたがふをやめよ〕
電気工夫
〔すゝきすがるゝ丘なみを〕
〔乾かぬ赤きチョークもて〕
〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕
中尊寺〔一〕
嘆願隊
〔一才のアルプ花崗岩(みかげ)を〕
〔小きメリヤス塩の魚〕
〔日本球根商会が〕
庚申
賦役
〔商人ら　やみていぶせきわれをあざみ〕
風底
〔雪げの水に涵されし〕
病技師〔二〕
〔西のあをじろがらん洞〕

卒業式

〔燈を紅き町の家より〕

母

雪袴黒くうがちし　　うなゐの子瓜食(は)みくれば
風澄めるよもの山はに　　うづまくや秋のしらくも

その身こそ瓜も欲りせん　　齢弱(としわか)き母にしあれば
手すさびに紅き萱穂を　　つみつどへ野をよぎるなれ

岩手公園

「かなた」と老いしタピングは、　杖をはるかにゆびさせど、

東はるかに散乱の、
なみなす丘はぼうぼうと、
大学生のタピングは、
老いたるミセスタッピング、
中学生の一組に、
弧光燈（アークライト）にめくるめき、
川と銀行木のみどり、
さびしき銀は声もなし。
青きりんごの色に暮れ、
口笛軽く吹きにけり。
「去年（こぞ）なが姉はこゝにして、
花のことばを教へしか。」
羽虫の群のあつまりつ、
まちはしづかにたそがるゝ。

選挙

（もつて二十を贏（か）ち得んや）
はじめの駑馬（うま）をやらふもの

（さらに五票もかたからず）　雪うち噛める次の騎者
（いかにやさらば太兵衛一族）　その馬弱くまだらなる
（いなうべがはじうべがはじ）　懼るゝ声はそらにあり

崖下の床屋

あかりを外れし古かゞみ、　客あるさまにみまもりて、
唖の子鳴らす空鋏。

かゞみは映す崖のはな、　ちさき祠に蔓垂れて、
三日月凍る銀斜子。

泝たつ泥をほとほとと、　かまちにけりて支店長、
玻璃戸の冬を入り来る。

のれんをあげて理髪技士、
弟子の鋏をとりあぐる。

白き衣をつくろひつ、

祭日〔一〕

谷権現の祭りとて、
むらがり続く丘丘に、

麓に白き幟たち、
鼓の音の数のしどろなる。

顕花青じろき稲むしろ、
朝の曇りのこんにやくを、

水路のへりにたゝずみて、
さくさくさくと切りにけり。

保線工手

狸(マミ)の毛皮を耳にはめ、　シャブロの束に指組みて、
うつろふ窓の雪のさま、　黄なるまなこに泛べたり。

雪をおとして立つ鳥に、　妻がけはひのしるければ、
仄かに笑まふたまゆらを、　松は畳め り風のそら。

〔南風の頬に酸くして〕

南風の頬に酸くして、　シェバリエー青し光芒。
天翔る雲のエレキを、　とりも来て蘇しなんや、いざ。

種山ヶ原

春はまだきの朱雲(あけ)を
アルペン農の汗に燃し
繩と菩提樹皮(マダカ)にうちよそひ
風とひかりにちかひせり

繞る八谷に劈靂の
いしぶみしげきおのづから
種山ヶ原に燃ゆる火の
なかばは雲に鎖さるゝ

ポランの広場

つめくさ灯ともす　宵の広場
むかしのラルゴを　うたひかはし
雲をもどよもし　夜風にわすれて
とりいれまぢかに　歳よ熟(う)れぬ

組合理事らは　藁のマント
山猫博士は　かはのころも
醸せぬさかづき　その数しらねば
はるかにめぐりぬ　射手(いて)や蠍

巡業隊

夜

霜のまひるのはたごやに、
酒の黄なるをわかちつゝ、

すがれし大豆（まめ）をつみ累げ、
風はのぼりをはためかし、

ひとりかすかに舌打てば、
黒きカードの面反（おもぞ）りの、

さらにはげしく舌打ちて、
楽手はさびしだんまりの、

がらすぞうるむ一瓶の、
そゞろに錫の笛吹ける。

よぼよぼ馬の過ぎ行くや、
障子の紙に影刷きぬ。

ひとりは古きらしゃ鞄、
わびしきものをとりいづる。

長ぞま（をさ）なこをそらしぬと、
投げの型してまぎらかす。

はたらきまたはいたつきて、
おほかた黒の硅板岩(イキイシ)礫を、
もろ手ほてりに耐へざるは、
にぎりてこそはまどろみき。

医院

陶標春をつめたくて、
水うら濁る島の苔、
瓶をたもちてうなゐらの、
神農像に饌(け)ささぐと、

水松(いちゐ)も青く冴えそめぬ。
萱屋に玻璃のあえかなる。
みたりためらひ入りくるや。
学士はつみぬ蕗の薹。

〔沃度ノニホヒフルヒ来ス〕

沃度ノニホヒフルヒ来ス、
荒レシ河原ニヒトモトノ、
モロビト山ニ入ラントテ、
或イハ鋸ノ目ヲツクリ、
青キ朝日ハコノトキニ、
樹ハサウサウト燃エイデテ、
カクテアシタハヒルトナリ、
鳥トキドキニ群レタレド、
青貝山ノフモト谷、
辛夷ハナ咲キ立チニケリ。
朝明ヲココニ待チツドヒ、
アルハタバコヲノミニケリ。
ケブリヲノボリユラメケバ、
カナシキマデニヒカリタツ。
水音イヨヨシゲクシテ、
ヒトノケハヒハナカリケリ。

雲ハ経紙ノ紺ニ暮レ、
梢螺鈿ノサマナシテ、

ツカレノ銀ヲクユラシテ、
ココニ二タビ口(クチ)ソソギ、

ソハヒマビマニトリテ来シ、
アルイハ百合ノ五塊(クワイ)ヲ、

ヤガテ高木モ夜トナレバ、
ヒトビトオノモ松ノ野ヲ、

樹ハカグロナル山山ニ、
コトトフコロトナリニケリ。

モロ人谷ヲイデキタリ、
セナナル荷ヲバトトノヘヌ。

木ノ芽ノ数ヲトリカハシ、
ナガ大母ニ持テトイフ。

サラニアシタヲ云ヒカハシ、
ワギ家ノカタヘイソギケリ。

〔みちべの苔にまどろめば〕

みちべの苔にまどろめば、
わづかによどむ風くまの、
まがつびここに塚ありと、
風はみそらに遠くして、

日輪そらにさむくして、
きみが頬ちかくあるごとし。
おどろき離(か)るゝこの森や、
山なみ雪にたゞあえかなる。

〔二山の瓜を運びて〕

二山の瓜を運びて、
たなばたの色紙購ふと、
ま青なる天弧の下を、

舟いだす酒のみの祖父(ぢぢ)。
追ひすがる赤髪(け)のうなゐ。
きららかに町はめぐりつ。

ここにして集へる川の、　　はてしなみ萌ゆるうたかた。

〔けむりは時に丘丘の〕

けむりは時に丘丘の、　栗の赤葉に立ちまどひ、
あるとき黄なるやどり木は、　ひかりて窓をよぎりけり。
（あはれ土耳古玉のそらのいろ、　かしこいづれの天なるや）
（かしこにあらずこゝならず、　われらはしかく習ふのみ。）

（浮屠らも天を云ひ伝へ、　三十三を数ふなり、
上の無色にいたりては、　光、思想を食めるのみ。）

そらのひかりのきはみなく、　ひるのたびぢの遠ければ、

をとめは餓ゑてすべもなく、　胸なる珞(たま)をゆさぶりぬ。

〔遠く琥珀のいろなして〕

遠く琥珀のいろなして、　春べと見えしこの原は、
枯草(くさ)をひたして雪げ水、　さゞめきしげく奔るなり。

峯には青き雪けむり、　裾は柏の赤ばやし、
雪げの水はきらめきて、　たゞひたすらにまろぶなり。

心相

こころの師とはならんとも、
いましめ古りしさながらに、
こころを師とはなさざれと、
たよりなきこそこゝろなれ。

はじめは潜む蒼穹に、
面さへ映えて仰ぎしを、
澱粉堆とあざわらひ、
いたゞきすべる雪雲を、
あはれ鵞王の影供ぞと、
いまは酸えしておぞましき、
腐(くだ)せし馬鈴薯とさげすみぬ。

肖像

朝のテニスを慨(なげか)ひて、
額は貢(たか)し　雪の風。

入りて原簿を閲すれば、
その手砒硫の香にけぶる。

暁眠

微けき霜のかけらもて、
街の燈（あかり）の黄のひとつ、

そは瞳（まみ）ゆらぐ翁面（おきなめん）、
かのうらぶれの贋物師（いかもし）、

写楽が雲母（きら）を揉み削げ、
春はちかしとしかすがに、

ちひさきびやうや失ひし、
あしたの風はとどろきて、

西風ひばに鳴りくれば、
ふるへて弱く落ちんとす。

おもてとなして世をわたる、
木藤（どう）がかりの門（かど）なれや。

芭蕉の像にけぶりしつ、
雪の雲こそかぐろなれ。

あかりまたたくこの門に、
ひとははかなくなほ眠るらし。

旱倹

雲の鎖やむら立ちや、
鳥はさながら禍津日を、
野を野のかぎり旱割れ田の、
術をもしらに家長たち、
〔老いては冬の孔雀守る〕

森はた森のしろけむり、
はなるとばかり群れ去りぬ。
白き空穂のなかにして、
むなしく風をみまもりぬ。

老いては冬の孔雀守る、　蒲の脛巾（はばき）とかはごろも、
園の広場の午后二時は、　湯管（くだ）のむせびたゞほのか。

あるいはくらみまた燃えて、　降りくる雪の縞なすは、
さは遠からぬ雲影の、　日を越し行くに外ならず。

老農

火雲むらがり翔（と）べば、　そのまなこはばみてうつろ。
火雲あつまり去れば、　麦の束遠く散り映う。

浮世絵

ましろなる塔の地階に、
やるせなみプジェー神父は、

さくらばなけむりかざせば、
とりいでぬにせの赤富士。

青瓊玉(ぬ)かゞやく天に、
これはこれ悪業乎(あくかさかえか)栄光乎、

れいろうの瞳をこらし、
かぎすます北斎の雪。

歯科医院

ま夏は梅の枝青く、
碧空(そら)の反射のなかにして、

風なき窓を往く蟻や、
うつつにめぐる鑿ぐるま。

浄き衣せしたはれめの、

ソーファによりてまどろめる、

はてもしらねば磁気嵐、　かぼそき肩をののかす。

〔かれ草の雪とけたれば〕

かれ草の雪とけたれば
裾野はゆめのごとくなり
みじかきマント肩はねて
濁酒をさぐる税務吏や
はた兄弟の馬喰の
鶯いろによそほへる
さては「陰気の狼」と
あだなをもてる三百も
みな恍惚とのぞみゐる

退耕

ものなべてうち訝しみ、
黄の上着ちぎるゝまゝに、
こゑ粗き朋らとありて、
栗の花降りそめにけり。

演奏会（リサイタル）せんとのしらせ、
豚（あのこ）はも金毛となりて、
いでなんにはや身ふさはず、
はてしらず西日に駈ける。

〔白金環の天末を〕

白金環の天末を、　みなかみ遠くめぐらしつ、
大煙突はひさびさに、　くろきけむりをあげにけり。

けむり停まるみぞれ雲、　峡を覆ひてひくければ、
大工業の光景（さま）なりと、　技師も出でたち仰ぎけり。

早春

黒雲峡を乱れ飛び　技師ら亜炭の火に寄りぬ
げにもひとびと祟むるは　青き Gossan 銅の脈
わが索むるはまことのことば
雨の中なる真言なり

来々軒

浙江の林光文は、
そが弟子の足をゆびさし、
かゞやかにまなこ瞠き、
凛としてみじろぎもせず。

ちゞれ雲西に傷みて、
警察のスレートも暮れ、
いささかの粉雪ふりしき、
売り出しの旗もわびしき。

むくつけき犬の入り来て、
額(ぬか)青き林光文は、
ふつふつと釜はたぎれど、
そばだちてまじろぎもせず。

もろともに凍れるごとく、
雪しろきまちにしたがひ、
もろともに刻めるごとく、
たそがれの雲にさからふ。

林館開業

凝灰岩（タフ）もて畳み杉植ゑて、
南銀河と野の黒に、
数寄（すき）の光壁（くわうへき）更たけて、
直翅の輩はきたれども、
麗姝六七なまめかし、
その牖々をひらきたり。
　千の鱗翅と鞘翅目、
公子訪へるはあらざりき。

コバルト山地

なべて吹雪のたえまより、
コバルト山地山肌の、
はたしらくものきれまより、
ひらめき酸えてまた青き。

旱害地帯

多くは業にしたがひて　指うちやぶれ眉くらき
学びの児らの群なりき

花と侏儒とを語れども　刻めるごとく眉くらき
稔らぬ土の児らなりき

……村に県（あがた）にかの児らの　二百とすれば四万人
四百とすれば九万人……

ふりさけ見ればそのあたり　藍暮れそむる松むらと
かじろき雪のけむりのみ

〔鐘うてば白木のひのき〕

鐘うてば白木のひのき、　ひかりぐもそらをはせ交ふ。
凍えしやみどりの縮葉甘藍（ケール）、　県視学はかなきものを。

早池峯山巓

石絨（アスベスト）脈なまぬるみ、　苔しろきさが巌にして、
いはかゞみひそかに熟し、　ブリューベル露はひかりぬ。

八重の雲遠くたゝへて、
白堊紀の古きわだつみ、
西東はてをしらねば、
なほこゝにありわぶごとし。

社会主事　佐伯正氏

群れてかゞやく辛夷花樹（マグノリア）、
風は明るしこの郷（さと）の、
雪しろたゝくねこやなぎ、
士（ひと）はそゞろに吝（やぶさ）けき。

まんさんとして漂へば、
馬を相する漢子（をのこ）らは、
水いろあはき日曜（どんたく）の、
こなたにまみを凝すなり。

市日

丹藤(タンド)に越ゆるみかげ尾根、
うつろひかればいと近し。

地蔵菩薩のすがたして、
栗を食(た)うぶる童(わらはべ)と、

縞の粗麻布(ジコート)の胸しぼり、
鏡欲りするその姉と。

丹藤に越ゆる尾根の上に、
なまこの雲ぞうかぶなり。

廃坑

春ちかけれど坑々の、
祠は荒れて天霧し、

事務所飯場もおしなべて、
鳥の宿りとかはりけり。

みちをながるゝ雪代に、
しばし閧してまもりびと、
錆びしナイフをとりいでつ、
さびしく水をはねこゆる。

副業

雨降りしぶくひるすぎを、
巨利を獲るてふ副業の、
青きさゝげの籠とりて、
銀毛兎に餌すなり。

兎はつひにつぐのはね、
べつ甲ゴムの長靴や、
ひとは頬あかく美しければ、
緑のシャツも着くるなり。

紀念写真

学生壇を並び立ち、　教授助教授みな座して、
つめたき風の聖餐を、　かしこみ呼ぶと見えにけり。

（あな虹立てり降るべしや）
（さなりかしこはしぐるらし）
……あな虹立てり降るべしや……
……さなりかしこはしぐるらし……

写真師台を見まはして、　ひとりに面をあげしめぬ。

時しもあれやさんとして、　身を顫はする学の長（をさ）、
雪刷く山の目もあやに、　たゞさんとして身を顫ふ。

……それをののかんそのことの、　ゆゑはにはかに推し得ね、
大礼服にかくばかり、　美しき効果をなさんこと、

いづちの邦の文献か、　　よく録しつるものあらん……

しかも手練（てなれ）の写真師が、　三秒ひらく大レンズ、
千の瞳のおのおのに、　朝の虹こそ宿りけれ。

塔中秘事

雪ふかきまぐさのはたけ、　玉蜀黍（きみ）畑漂雪（フキ）は奔りて、
丘裾の脱穀塔を、　ぼうぼうとひらめき被ふ。

歓喜天そらやよぎりし、　そが青き天（あめ）の窓より、
なにごとか女のわらひ、　栗鼠のごと軋りふるへる。

〔われのみみちにたゞしきと〕

われのみみちにたゞしきと、　ちちのいかりをあざわらひ、
ははのなげきをさげすみて、　さこそは得つるやまひゆゑ、
こゝろはむなしく息あへぎ、　春は来れども日に三たび、
あせうちながしのたうてば、　すがたばかりは録されし、
下品ざんげのさまなせり。

朝

早割れそめにし稲沼に、　いまころころと水鳴りて、
待宵草に置く露も、　睡たき風に萎むなり。

鬼げし風の襖子(あをし)着て、　児ら高らかに歌すれば、
遠き讒誣の傷あとも、　緑青いろにひかるなり。

〔猥れて嘲笑(あざ)めるはた寒き〕

猥れて嘲笑(あざ)めるはた寒き、　凶つのまみをはらはんと
かへさまた経るしろあとの、　天は遷ろふ火の鱗。

つめたき西の風きたり、　あららにひとの秘呪とりて、
粟の垂穂をうちみだし、　すすきを紅く燿(かが)やかす。

岩頸列

西は箱ケと毒(ドグ)ケ森、
古き岩頸(ネック)の一列に、

からくみやこにたどりける、
「その小屋掛けのうしろには、
立ちし」とばかり口つぐみ、
渋茶をしげにのみしてふ、

山よほのぼのひらめきて、
その雪尾根をかゞやかし、

椀コ、南昌、東根の、
氷霧あえかのまひるかな。

芝雀は旅をものがたり、
寒げなる山によきによきと、
とみにわらひにまぎらして、
そのことまことうべなれや。

わびしき雲をふりはらへ、
野面のうれひを燃し了(おほ)せ。

病技師〔一〕

こよひの闇はあたたかし、
ステッキひけりにせものの、
風のなかにてなかんなど、
黒のステッキまたひけり。

蝕む胸をまぎらひて、
くらき炭素の燈に照りて、
こぼと鳴り行く水のはた、
飢饉供養の巨石並めり。

酸虹

鵞黄の柳いくそたび、
片頬むなしき郡長、
窓を掃ふと出でたちて、
酸えたる虹をわらふなり。

柳沢野

焼けのなだらを雲はせて、　海鼠のにほひいちじるき。
うれひて蒼き柏ゆゑ、　馬は黒藻に飾らるゝ。

軍事連鎖劇

キネオラマ、　寒天光のたゞなかに、　ぴたと煙草をなげうちし、
上等兵の袖の上、　また背景の暁(あけ)ぞらを、　雲どしどしと飛びにけり。
そのとき角のせんたくや、　まつたくもつて泪をながし、

やがてほそぼそなみだかわき、　すがめひからせ、　トンビのえりを直したりけり。

峡野早春

夜見来（よみこ）の川のくらくして、　斑雪（はだれ）しづかにけむりだつ。

二すぢ白き日のひかり、　ややになまめく笹のいろ。

稔らぬなげきいまさらに、　春をのぞみて深めるを。

雲はまばゆき墨と銀、　波羅蜜山の松を越す。

短夜

屋台を引きて帰りくる、
うつは数ふるそのひまに、
みづから塗れる伯林青（べれんす）の、
胡桃覆へる石屋根に、
目あかし町の夜なかすぎ、
もやは浅葱とかはりけり。
むらをさびしく苦笑ひ、
いまぞねむれと入り行きぬ。

〔水楢松にまじらふは〕

「水楢松にまじらふは、
誰かやさしくもの云ひて、
「かしこに立てる楢の木は、
クロスワードのすがたかな。」
いらへはなくて風吹けり。
片枝青くしげりして、

パンの神にもふさはしき。」　　声いらだちてさらに云ふ。

「かのパスを見よ葉桜の、　　列は氷雲に浮きいでて、
ながら師も説かん順列を、　　緑の毬に示したり。」

しばしむなしく風ふきて、　　声はさびしく吐息しぬ。
「こたび県の負債せる、　　われがとがにはあらざるを。」

硫黄

猛しき現場監督の、　　こたびも姿あらずてふ、
元山あたり白雲の、　　澱みて朝となりにけり。

青き朝日にふかぶかと、　　小馬（ポニー）うなだれ汗すれば、

硫黄は歪み鳴りながら、
か黒き貨車に移さるゝ。

二月

みなかみにふとひらめくは、
月魄の尾根や過ぎけん。

橋の燈も顫ひ落ちよと、
まだき吹くみなみ風かな。

あゝ梵の聖衆を遠み、
たよりなく春は来らしを。

電線の喚びの底を、
うちどもり水はながるゝ。

日の出前

学校は、　稗と粟との野末にて、　朝の黄雲に濯はれてあり。
学校の、　ガラス片(ひら)ごとかゞやきて、　あるはうつろのごとくなりけり。

岩手山巓

外輪山の夜明け方、　息吹きも白み競ひ立ち、
三十三の石神に、　米(よね)を注ぎて奔り行く。

雲のわだつみ洞なして、　青野うるうる川湧けば、
あなや春日のおん帯と、　もろびと立ちてをろがみぬ。

車中〔二〕

稜堀山の巌の稜、　一木(き)を宙に旋るころ
まなじり深き伯楽(はくらく)は、　しんぶんをこそひろげたれ。

地平は雪と藍の松、　氷を着るは七時雨、
ばらのむすめはくつろぎて、　けいとのまりをとりいでぬ。

化物丁場

すなどりびとのかたちして、　つるはしふるふ山かげの、
化物丁場しみじみと、　水湧きいでて春寒き。

峡のけむりのくらければ、　山はに円く白きもの、
おそらくそれぞ日ならんと、　親方（ボス）もさびしく仰ぎけり。

開墾地落上

白髪かざして高清は、　ブロージットと云へるなり。
松の岩頸　春の雲、　コップに小く映るなり。
ゲメンゲラーゲさながらを、　焦げ木はかつとにほふなり。

額を拍ちて高清は、　　また鶯を聴けるなり。

〔鶯宿はこの月の夜を雪降るらし〕

鶯宿はこの月の夜を雪降るらし。

鶯宿はこの月の夜を雪降るらし、　黒雲そこにてたゞ乱れたり。

七つ森の雪にうづみしひとつなり、　けむりの下を逼りくるもの。

月の下なる七つ森のそのひとつなり、　かすかに雪の皺たゝむもの。

月をうけし七つ森のはてのひとつなり、　さびしき谷をうちいだくもの。

月の下なる七つ森のその三つなり、　小松まばらに雪を着るもの。
月の下なる七つ森のその二つなり、　オリオンと白き雲とをいたゞけるもの。
七つ森の二つがなかのひとつなり、　鉱石（かね）など掘りしあとのあるもの。
月の下なる七つ森のなかの一つなり、　雪白々と裾を引くもの。
月の下なる七つ森のその三つなり、　白々として起伏するもの。
七つ森の三つがなかの一つなり、　貝のぼたんをあまた噴くもの。
月の下なる七つ森のはての一つなり、　けはしく白く稜立てるもの。
稜立てる七つ森のそのはてのもの、　旋り了りてまこと明るし。

公子

桐群に臘の花治ち、
雲ははや夏を鋳そめぬ。

熱はてし身をあざらけく、
軟風のきみにかぐへる。

しかもあれ師はいましめて、
点鴟の術得よといふ。

桐の花むらさきに燃え、
夏の雲遠くながるゝ。

〔銅鑼と看版　トロンボン〕

銅鑼と看版　トロンボン、
芸を了りてチャリネの子、
孤光燈（アークライト）の秋風に、
その影小くやすらひぬ。

得も入らざりし村の児ら、
乞ふわが栗を喰（た）うべよと、
叔父また父の肩にして、
泳ぐがごとく競ひ来る。

〔古き勾当貞斎が〕

古き勾当貞斎が、
雪の楓は暮れぞらに、
いしぶみ低く垂れ覆ひ、
ひかり妖しく狎れにけり。

連れて翔けこしむらすゞめ、
沈むや宙をたちまちに、
たまゆらりうと羽はりて、
りうと羽はり去りにけり。

涅槃堂

烏らの羽音重げに、　雪はなほ降りやまぬらし。

わがみぬち火はなほ然へて、　しんしんと堂は埋るゝ。

風鳴りて松のさざめき、　またしばし飛びかふ鳥や。

雪の山また雪の丘、　五輪塔　数をしらずも。

悍馬〔二〕

廐肥(こえ)をはらひてその馬の、
けいけい碧きびいどろの、
勦き菅藻の袍はねて、
雲ののろしはとゞろきて、
まなこは変る紅(べに)の竜、
天をあがきてとらんとす。
叩きそだたく封介に、
こぶしの花もけむるなり。

巨豚

巨豚ヨークシャ銅の日に、
棒をかざして髪ひかり、
日本里長森を出で、
鬚むしやむしやと物喰むや、
金毛となりてかけ去れば、
追ふや里長のまなむすめ。
小手をかざして刻を見る、
麻布も青くけぶるなり。

日本の国のみつぎとり、
えりをひらきてはたはたと、
里長を追ひて出で来り、
紙の扇をひらめかす。

巨豚ヨークシャ銅の日を、
旋れば降(くだ)つ栗の花、
こまのごとくにかたむきて、
消ゆる里長のまなむすめ。

眺望

雲環かくるかの峯は、
侏羅紀に凝りし塩岩の、
古生諸層をつらぬきて
蛇紋化せしと知られたり。

青き陽遠くなまめきて、
花崗閃緑　削剥の、
右に亙せる高原は、
時代は諸(もろ)に論(あげつら)ふ。

ま白き波をながしくる、
かたみに時を異にして、

砂壌かなたに受くるもの、
洪積台の埴土（はにひち）壌土と、

かの峡川と北上は、
ともに一度老いしなれ。

多くは酸えず燐多く
植物群（フロラ）おのづとわかたれぬ。

山躑躅

こはやまつつじ丘丘の、
なんたる冴えぬなが紅ぞ、
いざうちわたす銀の風、

栗また楢にまじはりて、
朱もひなびては酸えはてし、
無色の風とまぐはへよ、

熱き日ざしに咲きほこる。
紅土（ラテライト）にもまぎるなり。
世紀の末の児らのため。

さは云へまことやまつつじ、　日影くもりて丘ぬるみ、　ねむたきひるはかくてやすけき。

〔ひかりものすとうなゐごが〕

ひかりものすとうなゐごが、　ひそにすがりてゆびさせる、
そは高甲の水車場の、　こなにまぶれしそのあるじ、
にはかに咳し身を折りて、　水こぼこぼとながれたる、
よるの胡桃の樹をはなれ、　肩つゝましくすぼめつゝ、
古りたる沼をさながらの、　西の微光にあゆみ去るなり。

国土

青き草山雑木山、　　はた松森と岩の鐘、
ありともわかぬ襞ごとに、　　白雲よどみかゞやきぬ。

一石一字をろがみて、　　そのかみひそにうづめけん、
寿量の品は神さびて、　　みねにそのをに鎮まりぬ。

〔塀のかなたに嘉菟治かも〕

塀のかなたに嘉菟治かも、　　ピアノぽろろと弾きたれば、
一、あかきひのきのさなかより、　　春のはむしらをどりいづ。
二、あかつちいけにかゞまりて、　　烏にごりの水のめり。

あはれつたなきソプラノは、　　ゆふべの雲にうちふるひ、
灰まきびとはひらめきて、　　桐のはたけを出できたる。

四時

時しも岩手軽鉄の、　待合室の古時計、
つまづきながら四時うてば、　助役たばこを吸ひやめぬ。

時しも赭きひのきより、　農学生ら奔せいでて、
雪の紳士のはなづらに、　雪のつぶてをなげにけり。

時しも土手のかなたなる、　郡役所には議員たち、
視察の件を可決して、　はたはたと手をうちにけり。

時しも老いし小使は、　豚に゛さかふバケツして、
農学校の窓下を、　足なづみつゝ過ぎしなれ。

羅紗売

バビロニ柳掃ひしと、　あゆみをとめし羅紗売りは、
つるべをとりてやゝしばし、　みなみの風に息づきぬ。

しらしら醸す天の川、　はてなく翔ける夜の鳥、
かすかに銭を鳴らしつゝ、　ひとは水縄(みなわ)を繰りあぐる。

みふゆの火すばるを高み、　　のど嗽ぎあるじ眠れば、
千キロの氷をになひ、　　かうかうと水車はめぐる。

〔天狗蕈　けとばし了へば〕

天狗蕈、けとばし了へば、
親方よ、
朝餉とせずや、こゝな苔むしろ。
……りんと引け、
　りんと引けかし。
　＋二八！
その標うちてテープをさめ来！……

山の雲に、ラムネ湧くらし、
親方よ、
雨の中にていつぱいやらずや。

牛

そは一ぴきのエーシャ牛、
窒素工場の火の映えは、
鈍き砂丘のかなたには、
さもあらばあれ啜りても、
月のあかりのそのゆゑに、
柵を叩きてたはむるゝ。

夜の地靄とかれ草に、
層雲列を赤く焦き、
海わりわりとうち顫ふ、
なほ啜り得ん黄銅の
こたびは牛は角をもて、
角をこすりてたはむるゝ。

〔秘事念仏の大師匠〕〔二〕

秘事念仏の大師匠、
北上ぎしの南風、

雲紫に日は熟れて、
川は川とてひたすらに、

たまたまその子口あきて、
元信斎は歯軋りて、

蒼蠅ひかりめぐらかし、
たゞ恩人ぞ導師ぞと、

元信斎は妻子もて、
けふぞ陸穂を播きつくる。

青らみそめし野いばらや、
八功徳水ながしけり。

楊の梢に見とるれば、
石を発止と投げつくる。

練肥（ダラ）を捧げてその妻は、
おのが夫（つま）をば拝むなり。

〔廐肥をになひていくそたび〕

廐肥をになひていくそたび、
水の岸なる新墾(にひばり)畑に、

エナメルの雲　鳥の声、
熱く苦しきその業に、

まなつをけぶる沖積層(アリビーム)、
往来もひるとなりにけり。

唐黍焼きはみてやすらへば、
遠き情事のおもひあり。

黄昏

花さけるねむの林を、
声ほそく唱歌うたひて、
さうさうと身もかはたれつ、
屠殺士の加吉さまよふ。

いづくよりか烏の尾ばね、
黄なる雲いまはたへずと、
ひるがへりさと堕ちくれば、
オクターヴォしりぞきうたふ。

式場

氷の雫のいばらを、　液量計の雪に盛り、
鐘を鳴らせばたちまちに、　部長訓辞をなせるなり。

〔翁面　おもてとなして世経るなど〕

翁面、　おもてとなして世経るなど、　ひとをあざみしそのひまに、
やみほゝけたれつかれたれ、　われは三十ぢをなかばにて、
緊那羅面とはなりにけらしな。

氷上

月のたはむれ薫ゆるころ、　氷は冴えてをちこちに、　さゞめきしげくなりにけり。
をさけび走る町のこら、　高張白くつらねたる、　明治女塾の舎生たち。
さてはにはかに現はれて、　ひたすらうしろすべりする、　黒き毛剃の庶務課長。
死火山の列雪青く、　よき貴人の死蝋とも、　星の蜘蛛来て網はけり。

〔うたがふをやめよ〕

うたがふをやめよ、　林は寒くして、
いささかの雪凍りしき、　根まがり杉ものびてゆるゝを。

胸張りて立てよ、　林の雪のうへ、
青き杉葉の落ちちりて、　空にはあまた烏なけるを。

そらふかく息せよ、　杉のうれたかみ、
烏いくむれあらそへば、　氷霧ぞさつとひかり落つるを。

電気工夫

（直き時計はさま頑(かたく)、　憎(ぞう)に鍛へし瞳(め)は強し）
さはあれ攀ぢる電塔の、　四方に辛夷の花深き。

南風(かけつ)光の網織れば、　ごろろと鳴らす碍子群、
艸火のなかにまじらひて、　蹄のたぐひけぶるらし。

〔すゝきすがるゝ丘なみを〕

すゝきすがるゝ丘なみを、　にはかにわたる南かぜ、
窪てふ窪はたちまちに、　つめたき渦を噴きあげて、
古きミネルヴァ神殿の、　廃址のさまをなしたれば、

ゲートルきりと頬かむりの、　闘士嘉吉もしばらくは、
萱のつぼけを負ひやめて、　面あやしく立ちにけり。

〔乾かぬ赤きチョークもて〕

乾かぬ赤きチョークもて、　文を抹して教頭は、
いらかを覆ふ黒雲を、　めがねうつろに息づきぬ。

さびしきすさびするゆゑに、　ぬかほの青き善吉ら、
そらの輻射の六月を、　声なく惨と仰ぎたれ。

〔腐植土のぬかるみよりの照り返し〕

腐植土のぬかるみよりの照り返し、　　材木の上のちひさき露店。

腐植土のぬかるみよりの照り返しに、　　二銭の鏡あまたならべぬ。

腐植土のぬかるみよりの照り返しに、　　すがめの子一人りんと立ちたり。

よく掃除せしラムプをもちて腐植土の、　　ぬかるみを駅夫大股に行く。

風ふきて広場広場のたまり水、　　いちめんゆれてさゞめきにけり。

こはいかに赤きずぼんに毛皮など、　　春木ながしの人のいちれつ。

なめげに見高らかに云ひ木流しら、　　鳶をかつぎて過ぎ行きにけり。

列すぎてまた風ふきてぬかり水、　　白き西日にさゞめきたてり。

西根よりみめよき女きたりしと、　角の宿屋に眼がひかるなり。
かつきりと額を剃りしすがめの子、　しきりに立ちて栗をたべたり。
腐植土のぬかるみよりの照り返しに　二銭の鏡売るゝともなし。

中尊寺〔一〕

七重の舎利の小塔に、　蓋なすや緑の燐光。
大盗は銀のかたびら、　をろがむとまづ膝だてば、
赭のまなこたゞつぶらにて、　もろの肱映えかゞやけり。

手触れ得ず十字燐光、　　大盜は礼して没(き)ゆる。

嘆願隊

やがて四時ともなりなんを、　　当主いまだに放たれず、
外の面は冬のむらがらす、　　山の片面のかゞやける。

二羽の烏の争ひて、　　さつと落ち入る杉ばやし、
このとき大気飽和して、　　霧は氷と結びけり。

〔一才のアルプ花崗(みかげ)岩を〕

一才のアルプ花崗岩(みかげ)を、　おのも積む孤輪車(ひとつわぐるま)。
（山はみな湯噴きいでしぞ）　髪赭きわらべのひとり。
（われらみな主(ぬし)とならんぞ）　みなかみはたがねうつ音。
おぞの蚕みちをよぎりて、　にごり谷けぶりは白し。

〔小きメリヤス塩の魚〕

小きメリヤス塩の魚、　藻草花菓子烏賊の脳、
雲の縮れの重りきて、　風すさまじく歳暮るゝ。

はかなきかなや夕さりを、
街をうづめて行きまどふ、

なほふかぶかと物おもひ、
みのらぬ村の家長たち。

〔日本球根商会が〕

日本球根商会が、
いたつきびとは窓ごとに、

よきものなりと販りこせば、
春きたらばとねがひけり。

夜すがら温き春雨に、
黒き葡萄と噴きいでて、

風信子華の十六は、
雫かゞやきむらがりぬ。

さもまがつびのすがたして、
朝焼けうつすいちいちの、

あまりにくらきいろなれば、
窓はむなしくとざされつ。

七面鳥はさまよひて、
小き看護は窓に来て、
ゴブルゴブルとあげつらひ、
あなやなにぞといぶかりぬ。

庚申

歳に七度はた五つ、
稔らぬ秋を恐(かしこ)みて、
庚の申を重ぬれば、
家長ら塚を理(をさ)めにき。

汗に蝕むまなこゆゑ、
七つと五つあるはたゞ、
昴(ばう)の鎖の火の数を、
一つの雲と仰ぎ見き。

賦役

みねの雪よりいくそたび、　風はあをあを崩れ来て、
萌えし柏をとゞろかし、　きみかげさうを軋らしむ。

おのれと影とたゞふたり、　あれと云はれし業なれば、
ひねもす白き眼して、　放牧（のがひ）の柵をつくろひぬ。

〔商人ら　やみていぶせきわれをあざみ〕

商人ら、やみていぶせきわれをあざみ、
川ははるかの峡に鳴る。

ましろきそらの蔓むらに、　雨をいとなむみそさゞい、

黒き砂糖の樽かげを、　ひそかにわたる昼の猫。

病みに恥つむこの郷を、
つめたくすぐる春の風かな。

風底

雪けむり閃めき過ぎて、　ひとしばし汗をぬぐへば、
布づつみになふ時計の、　リリリリとひゞきふるへる。

〔雪げの水に涵されし〕

雪げの水に涵されし、
犬の皮着てたゞひとり、
御料草地のどての上、
堇外線をい行くもの。

ひかりとゞろく雪代の、
兎のごとく跳ねたるは、
土手のきれ目をせな円み、
かの耳しひの牧夫なるらん。

病技師〔二〕

あへぎてくれば丘のひら、
白き手巾を草にして、
地平をのぞむ天気輪、
をとめらみたりまどゐしき。

大寺のみちをことへど、
はやくも死相われにありやと、
いらへず肩をすくむるは、
粛涼をちの雲を見ぬ。

〔西のあをじろがらん洞〕

西のあをじろがらん洞、
ゆげはひろがり環をつくり、

わさび田ここになさんとて、
たばこを吸へばこの泉、

それわさび田に害あるもの、
三には視察、四には税、

山を越したる雲かげは、
やがては藍の松こめや、

一むらゆげをはきだせば、
雪のお山を越し申す。

枯草原にこしおろし、
たゞごろごろと鳴り申す。

一には野馬　二には蟹、
五は大更の酒屋なり。

雪をそゞろにすべりおり、
虎の斑形を越え申す。

卒業式

三宝または水差しなど、　　たとへいくたび紅白の、
甘き澱みに運ぶとも、　　鐘鳴るまではカラぬるませじと、
うなじに副へし半巾は、　　慈鎮和尚（くわ）のごとくなり。

〔燈を紅き町の家より〕

燈を紅き町の家より、　　いつはりの電話来れば、
（うみべより売られしその子）　　あわたゞし白木のひのき。

雪の面に低く霧して、
あゝ鈍びし二重のマント、

桑の群影ひくなかを、
銅版の紙片をおもふ。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集　第六巻」筑摩書房
　　1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行
※底本は、1作品が1ページにおさまるように行間を調整している。ただし、このファイルでは、作品の末尾にそのつど［＃改ページ］と書き込むことはせず、頁の変わり目ごとに3行をあけた。
※底本は、「作者専用の詩稿用紙に書かれた詩篇を収録し」、多くの詩篇で、詩稿の形式に合わせて上下に二句を配置し、字間スペースなどを調整して下の句の頭が横にそろうように組んである。この形を取っている詩篇に関しては、本ファイルでも、句間を最低全角2字空けとし、下の句の頭を横にそろえた。
入力：junk
校正：今井忠夫
2003年9月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文語詩稿　一百篇

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/